

## かけ声や太鼓のリズムから問いが生まれ、いろいろなリズムの面白さに気付く子ども

— 小学2年「夏祭りを盛り上げるリズムをつくろう～リズムをつなげて～」の実践から —

### 1 題材のねらい

夏祭りを盛り上げるかけ声や太鼓のリズムをつくる活動を通して、リズムの面白さに気付いたり、拍によって友だちと表現する楽しさを味わったりすることができる。

### 2 授業の構想

#### (1) 子どものとらえについて

子どもたちは、前題材「ことばでリズム」において、拍の流れにのり「BINGO」のリズムに合わせた遊び歌の活動に取り組んだ。次の文章は、「こいぬのビンゴ」を歌ってリズム遊びをした日の子どもの日記である。

今日は、3人の友だちのつくったビンゴ(BINGO)をして、手でたたいたよ。どれもむずかしかったけど、3人目の「B・うん・うん・うん・O」がちょっとむずかしかったから、ぼくもこんなふうにこんどはつくりたいです。ぼくは、B・うん・うん・G・Oってやりたいです。  
(児童A)

児童Aは、友だちがつくったBINGOのリズムを手で打った。「BINGO(タンタンタタン)」では、アルファベットを一つずつ休符に置き換えていき、休符のあるリズムの手拍子を打った。すると、板書のリズムカードを操作したい子どもが表れ、 $\text{I} \text{ } \text{ } \text{ } \text{O}$ ,  $\text{B} \text{ } \text{ } \text{ } \text{O}$ ,  $\text{B} \text{ } \text{ } \text{ } \text{O}$ のリズム打ちを3人の子どもが提案した。児童Aは、どのリズムにも休符があることで、打ちにくく難しいと感じたようだった。また、児童Aは、3人のリズムの違いを感じながら、休符の場所を変えるといろいろなリズムになることに気付いたので、次は、自分がつくりたいという気持ちが生まれた。このように、友だちのリズムにふれることで、「どんなリズムにしようかな？」という問いをもち、新しいリズムをつくり出すことにつながる。そして、何度もリズムをつくることで、意欲的に取り組んだり、リズムの面白さに気付いたりできるようにしたい。そのために、一人一人が問いをもち、自分の思いを夢中になって追求しようとする題材構成とすることが大切だと考えている。

#### (2) 本題材の内容と音楽科で考える問いをもち追求する姿との関わりについて

低学年の子どもたちは、リズム感覚が発達する時期である。そこで、リズム感覚を育てるために、リズム遊びや即興的な音楽づくりの活動を仕組んでいく。本題材では、子ども達が楽しみにしている夏祭り(毎年7月に行う全校活動)を盛り上げるかけ声や太鼓のリズムづくりを活動として設定する。リズムをつくる活動の導入として、本校オリジナル曲「附小音頭」を扱い、歌ったり踊ったり太鼓を叩いたりしながら、「附小音頭」の楽しい気分を感じることや、楽曲が盛り上がる太鼓のリズムに気付く活動を展開する。次に、気付いた太鼓のリズムを生かして、歌唱・器楽教材「おまつりワッショイ」(きたかみじゅん作詞/吉原順作曲)の合いの

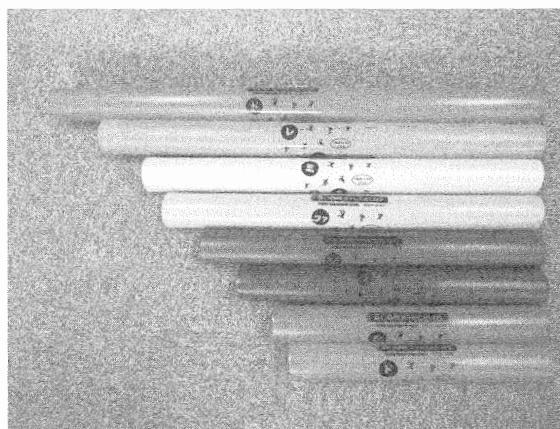


図1: ドレミパイプ

手部分（2拍のリズム）のリズムをつくる活動を行う。2拍のリズムづくりを即興的に試していく過程で、「もっと盛り上がるリズムはないのかな。」「どんなリズムが楽しいかな。」という問いが生まれリズムづくりへの意欲が高まっていくであろう。そして、リズムを体で感じられるように、一人2本ドレミパイプ（ブームワッカー）（図1）で、リズムをつくる活動を取り入れ、リズムづくりの意欲を高めたり、即興的にリズムをつくったりすることができるようにしたい。

### (3) 子ども一人一人が問いをもち追求する姿を育成するための具体的な手立てについて

そこで、本題材では、次の三点を特に具体的な手立てとして展開する。

#### ① 題材のねらいに即した音楽を形づくっている要素に焦点をあてた授業展開の構想

本題材で着目する音楽を形づくっている要素は、拍とリズムである。そこで、題材を通して拍の流れにのる力を身に付けるために、リズムリレーやリズムをつなげていく活動を取り入れる。リズムリレーでは、毎時間、授業の導入にリズムリレーの活動を位置付け、拍にのり、自分の思いを即興的に音楽表現する楽しさを味わえるようにしていく。リズムについては、つくったリズムをタンタンなどとリズム唱をして、音の長さを自然と意識したり、「ソレ！」などの言葉のリズムで唱えて、できたリズムを言葉で表したりしていく。また、リズム譜を板書したり、ワークシートに書いて、できたりリズムを言葉で表したりしていく。また、リズム譜を板書したり、ワークシートに書いて、できたりリズムを言葉で表したりしていく。また、リズム譜を板書したり、ワークシートに書いて、できたりリズムを言葉で表したりしていく。また、リズム譜を板書したり、ワークシートに書いて、できたりリズムを言葉で表したりしていく。

#### ② 一人一人が思いや表現を表出する場面の設定

一人一人の思いが表現できたり、認め合ったりする学習過程として、1単位時間の中に①気付く②試す③伝え合う④高め合う活動を位置付ける。③と④では、友だちのリズムにふれたり、多様なリズムに気付いたりすることを通して、「もっと盛り上がるリズムはないのかな。」と、リズムをつくっていく姿につなげていく。そのためにも、①気付く②試すの時間を確保し、自分で何回も試行錯誤して自分なりのリズムをつくるようにする。リズムの面白さに気付くためには、自分と違う多様なリズムを意識して聴いたり、一緒に打ったりして、違いに気付く場をもつことが大切である。そのために、伝え合う場面を設定したグループ活動を取り入れる。学習形態を一人→グループ→全員→一人と互いの表現を発表したり聴き合ったりして、よさに気付くようにする。できたリズムをグループで拍ののって発表することで、2拍の中にリズムが収まっていくことを感覚的に養っていく。このような学習形態から、学び合いの中で、即興的な音楽表現に意欲をもって取り組み、技能の幅を広げるようにする。

#### ③ 子どもの感じ方や表現を認める教師の姿勢と、子ども同士の言葉をつなげていく教師の言葉かけ

「どうしてこのリズムにしたの。」と子どもがつくったリズムの工夫を尋ね、子どもの思いを引き出し、感じたことを全体へ広げていく。全体で学び合う場面では、「友だちのリズムを紹介しよう」と声をかけ、気付いたことを全体で交流していく。その時に、一人の子どもが感じ取ったリズムのよさを確認するために、みんなで再現することで、体で感じ取っていくことを大切にする。また、子どもが見付けたリズムの多様さや休符の生かし方を賞賛していき、リズムづくりの追求を支えていく。

### 3 展開計画（全5時間）

次	主な学習	時	具体的な学習・内容
1	附小音頭のかけ声リズムで遊ぼう	1	・「附小音頭」の旋律にある合いの手の面白さを感じ取りながら、「附小音頭」にふさわしい表現を工夫している。

2	リズムをつなげて、「夏祭りワッショイ」をつくろう	2	・「夏祭りワッショイ」の範唱を聴いて、「きょうは楽しいなまつり♪」に続く2拍のいろいろなかけ声リズムをつくる。
		3	・「たいこのおとがひびくよ♪」に続く2拍のいろいろなかけ声リズムをつくる。
2	リズムをつなげて、「夏祭りワッショイ」をつくろう	4	・さらに盛り上がる「夏祭りワッショイ」にするための自分の考えを話し合う。
		4	・「ささのは かついだぎょうれつ♪」に続くリズムを、休符を生かしてつくる。
		4	・3人や6人のグループで気付いたり真似したりしたリズムのよさを、発表する。
2	リズムをつなげて、「夏祭りワッショイ」をつくろう	5	・自分のつくったリズムをつなげて表現する。
		課外	・夏祭りの入場曲として、全校児童に発表する。

## 4 授業の実際

### ① 拍とリズムに焦点をあてた授業展開の構想

#### 拍について

第1時は、附小音頭の旋律にある合いの手を聴き取り、それらが生み出すよさや面白さを感じ取りながら、附小音頭にふさわしい表現を工夫した。本時のめあてを「ソレ！のかけ声であそぼう」と教師から提示すると、子どもたちは、歌ったり、踊ったりして「ソレ！」のかけ声を楽しんだ。以下は、この日の児童Bの日記である。

先生あのおね、音がくでふしょうおんどをやったよ。大だいこをしたけど、ぼくは、「ドカンドドン」ってぐらい大ききたいたよ。すごくたのしかったよ。  
(児童B)

児童Bの「ドカンドドン」という太鼓のリズムの表現に、音の大きさや躍動するリズムが伝わってくる。何度も繰り返して楽しむ中で、「もっと盛り上がるようにしたい。」という思いが高まり、「ダン」「ピョン」「ヤー」「パン」などとたくさんのかげ声がうまれた。合いの手のリズムの「ソレ！がないとどうなの？」と問いかけると、「ソレ！がないと盛りあがらない。」「(拍が) あまってもったいない。」と、合いの手のよさを感じ取ることができた。大太鼓は一つしかなかったので、バチのように持つことができるドレミパイプを一人2本ずつ渡したところ、「ソレ」以外にも曲に合わせて様々なリズムで打ち始めた（図2）。自分一人や友だちと一緒にリズムを打つ姿も見られ、「どんなリズムがいいのかな？」という問いが生まれていた。打ったリズムを全体で確認すると五つ（A～E）に分類できた。

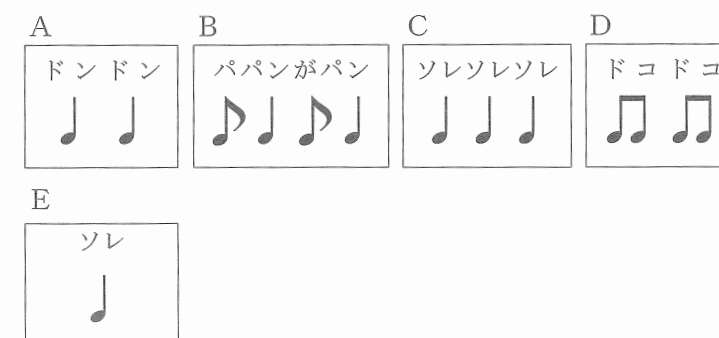


図2：大太鼓とドレミパイプでリズムを打つ子ども

以下は、第1時のふりかえりの内容である。

- 自分でリズムをつくって楽しかったよ。
- いろいろな新しいリズムができて、楽しかったよ。
- 友だちが教えてくれたり、リズムをつなげたり、いっしょにできて楽しかったよ。

この時間の子どもたちは、汗だくになって笑顔で活動していた。ふりかえりからも、夏祭り音頭を、歌ったり踊ったり、大太鼓を叩いたりして、体中で音楽を味わっている子どもの様子が伺える。そして、盛り上がり楽しんで気持ちが生まれたり、言葉や曲に合わせて自分のつくったリズムをドレミパイプで叩いて楽しんだりしたことも伺える。「また今度も叩きたい」「もっと違うリズムをつくりたい。」とリズムをつくっていく意欲に満ちていた。

### リズムについて

リズムリレーは、2拍のまねっこリレーを毎時間の導入で実施した。「先生→子ども全員」は、1年生で経験してきているので、「子どもA→他の子ども全員→子どもB→他の子ども全員」というリズム模倣を仕組んでいく。子どもだけでは、2拍の流れを感じ取ることが難しいので、つなげていく人数を8人→15人→28人と増やしていく。すると、拍をつなげる必要感に気付いたり、拍にのる充実感を味わうことができた。学級全員でつながった時は、 Rond形式の音楽の楽しさを味わえた。最初は「タンタン」(JJ)というリズムが多かった子どもも、友だちのリズムを真似したり取り入れたりして、休符やシンコーションを使ったリズムをつくるなど、リズムリレーを継続することにより、子どものリズムの多様性が見られるようになった。また、リズムリレーは、即興的につくる楽しさを感じたり、「どんなリズムにするといいのかな。」「友だちのリズムはどんなリズムかな。」という問いにつながったりした。

以下は、28人でリレーした日の日記である。

先生あのね、今日、けんきゅう会がありました。リズムリレーがたのしかったです。28人全いたたけたのでせいかうしました。みんな、とてもむずかしいリズムでびっくりしました。(児童D)

音楽づくりの活動場面では、何度も繰り返すついたり、即興的につくっていったりすることが大切だと考えるが、自分のリズムを確認したり、つくったリズムを整理していくために、ワークシートを用意した(図3)。ワークシートは板書と同じ形式にして、つくったリズムを書き込んでいくようにした。つくったリズムを書くだけでなく、歌詞も書き込むことで、小節や拍を自然と感ずることができるようにした。めあてやふりかえりも書く欄を設けることで、自分が学びの中で、変容していくことを確認できるようにした。

### ② 一人一人が思いや表現を表出する場面の設定

第2時から、盛り上がる2拍の合いの手のリズムをつくっていった。第1時のふりかえりをもとに、子どもたちと一緒に「自分でリズムをつくったり、友だちのリズムを聴いたりして、いろいろなあたらしいリズムをつくらう」というめあてを立てた。そして、「みんなの夏祭り音頭をつくらう」という題材の見通しを確認した。

一人一人の思いや表現を表出できるように、①気付く②試す③伝え合う④高め合うという学習過程で展開していくこととした。

日	リズム	歌詞
7月10日	ちびちびちびちび ちびちびちびちび ちびちびちびちび	ちびちびちびちび ちびちびちびちび ちびちびちびちび
7月22日	たのしいリズム たのしいリズム たのしいリズム	たのしいリズム たのしいリズム たのしいリズム
7月28日	たのしいリズム たのしいリズム たのしいリズム	たのしいリズム たのしいリズム たのしいリズム

図3: ワークシート

この学習過程を設定したことで、学習の見通しをもつことができ、自分たちで主体的にリズムをつくる姿が見られた。そうした中で、次のような問いのつながりがみられた。まず、「リズムができるかな?」というリズムづくりへの不安な問い。次に、「どんなふうにしたかな?」というリズムの種類やドレミパイプのたたき方の工夫についての問い(図4)。このように、不安から工夫へのつながりが見られた。この問いのつながりは、「不安→工夫」という問いの循環を繰り返して、新しいリズムを生み出す原動力にもなっていった。友だちに伝える場面では、「新しいリズム(友だちのつくったリズム)ができるかな?」という自分への問いから友だちへの問いに変化した(図5)。自分のリズムを大事にしながらか、友だちのリズムを見たり打ったりすることで新しいリズムを知り、打てた時に感じる喜びに高まる問いである。



図4: まず自分でつくっての場面

①気付く→ ②試す→  
リズムができるかな?  
どんなふうにしたかな?

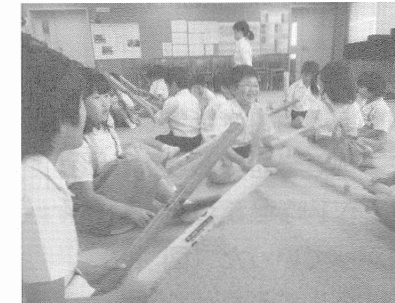


図5: 友だちに伝えて・真似しての場面

③伝え合う→  
新しいリズムができるかな?



図6: みんなに伝えての場面

④高め合う  
どんなリズムかな?  
ああなりたいな。

以下は、児童Eの第2時のふりかえりである。

今日、リズムをノーマスでできたよ。ともだちの(つくったリズム)もできたし、じぶんのむずかしいリズムもできたよ。(児童E)

児童Eは、自分でリズムをつくった喜びを感じた上に、正確に打つことができた喜びを語っている。実際、児童Eは、何回か練習していくうちに、正確に打つことができるようになる姿が見られた。さらに、友だちのリズムもしっかり見て、真似して打てたことが伝わる。

以下は、児童Fの第1時と第2時のふりかえりである。

① きょうは、すごたのしかった。(第1時)  
② きょうは、みんなでリズムをつくって、みんないろいろリズムをつくったから、わたしもあいうふうになりたいよ。(第2時) (児童F)

児童Fのふりかえりから、一人一人の思いを表出できる練習の場を確保したり、グループ、全体と学習形態を変化させたりすることで、問いが生まれ、つながり、循環し、互いに高めながら、次はこうなりたいたいという思いになったことが伺える。

③ 子どもの感じ方や表現を認める教師の姿勢と、子ども同士の言葉をつなげていく教師の言葉かけ  
自分がつくったリズムを友だちに伝えるグループ活動の場面から考察する。この場面は、子どもたちが、友だちと一緒に活動したい、多くの友だちと活動したいと願っている場でもあった。そこで、教師がグループの人数を3人あるいは6人と指定し、誰とでも即興的に活動できるようにした。グループ活動では、リズムリレーで行った方法を生かし、「自分→全員→友だち→全員」と拍ののって発表していった。しかし、子どもたちは、新しいリズムに出会うので、真似できなくて

困っていた。すると、「難しいリズムでできないな（打てないな）」と言う子どもへ、つくった子どもや打てる子どもが教えたり、何回か繰り返して打つなどの姿が自然と見られた。子どもから子どもへ音楽を伝え、新しいリズムを獲得していくことができた。その際、教師は「困っている友だちに優しく教えられているね。」と認める声がけをしていった。自分と違うリズムに出会った子どもは、その驚きをみんなに伝えたい。「見つけたおすすめのリズムは？」と尋ねると、多くの子どもが全体へ発言し、気付きを交流することができた。友だちのリズムを全体で打つことで「なるほど、そんなリズムもできるなあ。」「まねしてみよう。」という思いが広がっていった。また、さらに盛り上がるリズムづくりへ向かわせていくために、「すごいなあ。」「むずかしいなあ。」と感じたつぶやきをとらえ、「どこがむずかしいの。」と問い返すことで、リズムや休符の工夫に気付かせ、追求していく次の姿へつなげることができた。

## 5 おわりに

本題材を通して子どもたちは、リズムの面白さに気付いたり、拍にのってリズムをつくる楽しさを味わうことができた。つくったリズムは、第1時で5種類だったのが、最後には24種類まで広がっていった（図7）。子ども一人一人も、毎時間多様なリズムをつくり続けることができた。それは、三つの手立てが有効だったといえる。①身につける力を明確化し、力が身につくようにリズムリレーの活動を取り入れたり、つくるリズムを2拍と限定するなど、工夫したことが有効だった。②友だちと関わる学習場面を多く学習過程で設定したことが有効だった。真似したり、違いに気付いたりしながら、新しいリズムにふれることで、リズムの面白さを感じ取るにつなげた。また、太鼓のリズムを感じるドレミパイプ（ブームワッカー）を教具にしたことで、友だちとリズムを体で感じながら楽しくつくるにつなげた。③教師のはたらきかけについては、全体の前で子どものリズムのよさを賞賛していくことが、太鼓やかけ声リズムの面白さを感じ取ることに有効だった。そして、子どもたちが楽しみにしている行事（夏祭り）の音楽をつくるという題材の魅力も、主体的にリズムをつくる姿につなげたと考える。

しかし、一方で、発達段階を考慮した学習過程や題材を貫く問いの設定については、課題があると考えられる。グループ活動では、多様な人数、あるいは固定しないグループ活動により、人間関係づくりや多様なリズムを知ることができた。しかし、低学年という発達段階を考慮し、ペア学習を設定していけば、さらにじっくりと耳を澄まして聴くことや、他者の表現のよさを実感できるのではないかと考える。また、子どもたちは、言葉のリズムに浸っていたのか疑問が残る。かけ声や言葉から生まれるリズムづくりのアプローチを探っていくと、より言葉のリズムの面白さに気付ける活動へ迫っていけるのではないだろうか。音楽のよさに気付くためには、音や音楽を味わうことが大切である。今後は、出会った楽曲の気付きを基に、追求していく問いが生まれ、題材を通して問いがつながり、循環しながら高まっていく題材構成を明らかにしていくことを課題としたい。

（文責）神門 洋子

1. おまけのリズム

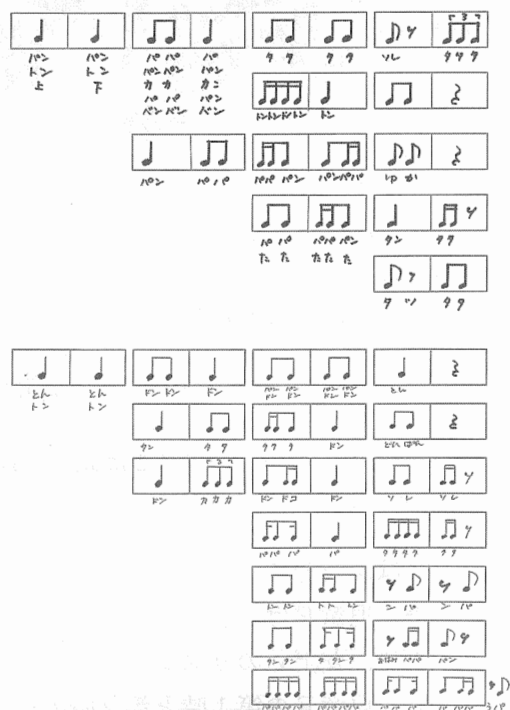


図7：子どもがつくったリズム